



33

「果」

今年も岩田さんの家からぶどうが届いた。この季節の恒例だ。箱を開けると、手に取る前から甘い香りが広がる。ひと粒ひと粒が今にも弾けそうなほど大きく育った、立派なぶどう。毎年こうして買わせてもらっているけれど、どこか特別な贈り物のように感じてしまう。その瑞々しさを味わうたび、あの赤い車の記憶がよみがえってくるのだ。

高校の頃、サッカーの試合で怪我をして、しばらく松葉杖の生活になった。バスで三時間以上かけて茨城県の波崎まで遠征に行き、ようやく着いた先の一試合目で、ふたりがかりの猛烈なタックルに遭い右足を折った。知らない土地で乗る救急車は心細く、さまざまな怪我の中であれほどの激痛を経験したのも初めてだった。

家に戻ると、想像以上に不便な日常が待っていた。細かく書けばキリがないが、通学するだけでもとにかく一苦劳だった。僕が通っていた学校までは、電車と徒歩で片道一時間。しかも高校の最寄り駅からはチャリ通だったため、自転車に乗ることができない松葉杖ではその道のりが途方もなく長く感じられた。

そんな僕に、声をかけてくれた人がいた。同じクラスの岩田のお母さんだ。「車で送っていくよ」と言ってくれたのだ。しかも一度きりではなく、しばらくの間ほぼ毎朝。遠慮する気持ちも少しあったが、ありがたく甘えさせてもらうことにした。

春の朝、赤い車が近づいてくる。運転席から聞こえる

「おはよう！」という明るい声。そして後部座席には岩田が「よ」と言ったか言わぬか、落ち着いた様子で座っていて、その横に僕が乗り込む。車は軽やかに走り出し、窓の外には季節が移り変わる景色が流れていった。足の痛みや不自由さは相変わらずあったけれど、車に揺られている時間は、不思議と心が軽くなるようだった。

僕はクラスで岩田とたくさん話す間柄というわけではなかったけれど、無言でも気まずい感じはなく、それが心地よかった。そんな「朝の日課」がどれほど続いたのだろう。梅雨が明ける頃には部活に戻っていた気がするけれど、最後の日はつきりとは思いつけない。

岩田さんが育てているのはぶどうだけではない。梨やマスカットも作っている。果樹園を営むのはとても大変なことでだ。毎年注文しているけれど、気候の影響で今年は梨ができなかった、という年もある。そんな苦労の末に届くのが、この大粒のぶどうなのだ。

誰かのさりげない親切に支えられる心強さを、あの頃ほど実感したことはないかもしれない。だからこそ、岩田さんの家のぶどうは格別に美味しい。箱を開けるたび、甘さの奥にあの温かな時間を思い出すのだ。

あのときしてくれた親切が、変わらぬ味とともに、こうして今も僕の中に残っている。